

# 日韓W杯遺産「世界の芝」

## 第一部「変わる街」

「平成」は30年の節目を迎え、次の時代に引き継がれようとしている。本紙神奈川県版では今年、年間企画「平成時代・神奈川」を展開し、この間の出来事や変化、未来につながる話題を取り上げていく。第一部「変わる街」では、時代を象徴する街の動きに焦点を当てる。



（79）＝写真Ⅱ。あの大会が残したレガシー（遺産）について問うと、「世界が認めた芝とボランティアだ」と言い切った。

グラウンドに立つと、巨大な観客席が目前に迫ってくる。平成半ばの1998年、横浜国際総合競技場は、国内最大級の収容人数を誇り、数々の国際大会の舞台になってきた。

水点下近くまで冷え込む真冬でも、グラウンドは陽光を照り返して緑色に輝く。芝は一日にして成らず。」「グリーンキーパー」の柴田智之さん（52）＝相模原市＝は、オープン前から20年以上、競技場の芝を見守り続けてきた。



「ラグビーW杯、東京五輪には世界最高の芝を用意したい」と意気込む柴田さん。後ろは横浜国際総合競技場（横浜市港北区で）

### 横浜でのスポーツ国際大会を巡る動き

昭和	39(1964)年	東京五輪で三ツ沢公園球技場がサッカー会場に
平成	元(1989)年	日本サッカー協会がW杯招致表明
	10(1998)年	横浜国際総合競技場オープン。「横浜ダービー」(横浜マリノス対横浜フリューゲルス)の観客数はJリーグ新記録(当時)の5万人超
	14(2002)年	同競技場などでW杯日韓大会。日本がW杯初勝利
	29(2017)年	19年ラグビーW杯で同競技場が日本戦の会場などに正式決定
	2020年	東京五輪サッカー競技が同競技場で開催

## 横浜にボランティアの芽



日韓大会決勝の試合前セレモニーを楽しむ大観衆（2002年6月30日、横浜国際総合競技場で）

連盟)から感謝状を贈られた。根が張った強い芝を作ってきた結果、吸水性が高くなったという。当時、欧米を中心に「日本の芝は遅れている」という認識が根強かっただけに、柴田さんは「世界水準」という評価がうれしかった。

2002年のFIFA理事会で公表された日韓大会の総括を、小倉さんは今も覚えている。「両国のホスピタリティー(もてなし)により、『笑顔のW杯』として記憶に残るだろう」。好評価だったことは、あまり知られていない。「笑顔をもたらししたのは市民ボランティアだろう」と小倉さん。阪神大震災の復興支援で注目された1995年は、「ボランティア元年」とされるが、横浜はW杯が元年かもしれない。「市民力」を掘り起こし、延べ約7000人が2か月間活動した。

芝の管理は選手にとって最も大切なことで、不可欠なおもてなしだ。次の大舞台は、日本代表戦や決勝など7試合が行われる19年ラグビーW杯。ラグビーはサッカー以上の耐久性が求められ、人工芝と天然芝を混ぜて活用する実

98年のフランス大会を現地観戦し、住民に歓迎された経験から、「次は自分の番だ」と参加したのは同会の長井聡子事務局長。「横浜ではW杯を機にボランティアという言葉が定着し、『奉仕』という堅苦しさや薄れ、気軽に参加できるものになった」と指摘する。

平成を通じて、国際大会の会場にふさわしい都市に成長した横浜。来年以降、ラグビーW杯や東京五輪などビッグイベントが続く。「これからは笑顔で迎えたい」。長井さんは新たな出会いを心待ちにしている。(戸田貴也)